

池上嘉彦（東京大学）

日本語の「ナル」や英語の 'become' といった動詞は、理想レベルでの〈状態の変化〉(change in state) という概念の言語化にそれなりに近似的に関与する語として、基本語彙に属するものと受けとめられている。しかし、個々の言語での「ナル」的な表現の慣用を調査してみると、一応共通に〈状態の変化〉と呼べる自体の言語化に関与してはいるものの、それをどのように把握するかという点では多様性¹（例えば、〈起点〉中心か、〈到達点〉中心か）が見られるし、さらに、文法化が起こっているか、語用論レベルの含意が伴うかどうか（例えば、「結婚スルコトニナリマシタ」が控え目な公言と受けとめられるか、強制的な結婚のことと受けとめられるか）といった違いもある。言語話者としてのヒトは、「ナル」的な表現にどのような意味合いを読み込むことができるのか、あるいは、できないのか、その際、どの程度の普遍性と相対性を確認できるのか—機能的に隣接すると思われる「(ラ)レル」による〈出来(しゅったい)〉などとの対比も視野に入れつつ、究極的には「ナル」的な表現の認知類型論といったものの構築へ向けて、ごく初期的なレベルでの観察と考察を進めてみたい。

この段階で司会者個人として特に注目したいのは、「ナル」的な表現の好みという言語レベルの現象と言語話者レベルでの〈主観的把握〉('subjective construal': ただし、よくある誤解を避けるために、〈主客合一〉的な把握、あるいは、〈体験的〉な把握と言った方がよい) と呼ばれる事態把握のスタンスとの間の相関性²である。次の(1)a), b)は、英語でよく見られる「移動動詞」の「状態変化動詞」への転用(e.g. 'John went mad', 'He fell ill', 'The well ran dry')とは対照的に、日本語における逆方向への転用とも見てとれる例として、かつて池上(1981: 252ff.)³で言及したものである。

(1) a) 今は武蔵野の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。(更科日記：平安中期)

b) 関山をもうち越えて、大津の浦になりにけり。(平家物語：鎌倉前期)

『角川古語大辞典』(1994)の「なる」の項に、〈到着する〉という語義として収録されており、現代日本語なら、「武蔵の国／大津の浦に来た／着いた」というところである。しかし、事態把握の仕方は、明らかに異なる。「なる」の場合、絵巻物に描かれた旅する主人公の立場を考えてみるとよい。主人公は旅を続けるにつれて、環境の見えが変わる(違うものになる)と感じる。(そして、それによって、自らが移動していることも感じ取る：cf. Neisser (1988)の言う 'ecological self'.) 環境の見えの変化が、ある特定の見えになったところで静止すればそれは目的地に着いたということである。旅するという営みを(i)旅する主人公に焦点を当て、主人公という〈個体〉(〈モノ〉)の〈移動〉('change in locus')として、いわば〈観察者〉的(〈主客対立〉的)なスタンスで事態把握するのか、あるいは、(ii)主人公の埋め込まれている環境に焦点を当て、主人公にとっての環境の〈見え〉が旅するにつれてどのように〈推移〉('change in state')するかを主人公の〈体験〉を通して、〈当事者〉的(〈主客合一〉的)なスタンスで事態把握するのか、という対立であり、前者は「〈モノ〉が〈スル〉」という様相での事態把握、後者は「〈コト〉が〈ナル〉」という様相での事態把握、後者での事態把握の場合、主人公は観察の基点に身を置いているが故に、自ら自身は自らの〈見え〉には含まれず、〈ゼロ〉として表現されるということである。⁴

(2) [英語の 'Spring comes' と対比して日本語の「春めく」という表現からは]「(太陽の輝きが増して) あたりがだんだんと明るくなって、(気温が上がって) 空気がしだいに和んでくる—こういう〈推移〉の感覚が、肌を通して感じとれる。(吉川幸次郎「日本文学の特異さ」日本文学文化研究国際会議(1972)における講演)

「春が来る」という表現との対比において「春になる」という表現にも同様の体感的な意味合いが感じとれるのではないか。Cf. a) 石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも『万葉集』8/1418, b) 年のうちに春は来にけり—年を去年とやいはむ今年とや言はむ『古今集』1。現在は古語法になっているが、ドイツ語の 'Es sommert' (英語に直訳すると 'It summers' ('夏めく')?) のような表現参照。

¹ 「日本語周辺の諸言語における「ナル表現」をめぐって—認知類型論的研究を目指して」『日本認知言語学会第12回大会予稿集』p.15 参照。 ² 『「する」と「なる」の言語学』を振り返って『国語と国文学』8.9。 ³ 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店, 1981。 ⁴ Cf. 'A linguistic parallel to ecological self ... is a zero form.' Honda, Akira: 'Linguistic Manifestations of Spatial Perception' (Ph.D. dissertation, University of Tokyo, 1994), p.95.